

【ねがいましては】

令和7年6月21日

KYOWA SCHOOL

第419号

「島のおばあ」

灰谷健次郎さんの著書「灰谷健次郎の発言〈8〉『いま』を読む」より、思わず「探していたものが見つかった！」と、思える一文があります。

前置きです。灰谷さん（1934～2006、大阪教育大学、児童文学作家、著書には『兎の眼』『太陽の子』『天の瞳』など）は、小学校教員17年を経、3年に及ぶ沖縄やアジアでの放浪生活後、児童文壇にデビュー、現行教育の問題点に自らの視点で鋭く切り込み、数々の文学作品を残しています。私の原点ともいうべき方です。『子どもは小さな巨人』だと豪語しました。私のお気に入りの詩を紹介します。小学1年生の子が作った作品です。

いぬは
わるい
めつきはしない

まだまだ数えきれないほどご紹介したい作品がありますが、今回は灰谷さんの8冊シリーズから最終巻、「島のおばあとの対話」より、一部分を紹介いたします。

島のおばあ・・・「わたしは本もよく読みますよ」

灰谷さん・・・「それはいいですね」

島のおばあ・・・「あなたの本は、まだ、読んだことはないけれど」

灰谷さん・・・「いえ、いえ」

島のおばあ・・・「こんど必ず、読みますからね」

灰谷さん・・・「はい」

島のおばあ・・・「人は、いくつの年になっても勉強は大事です」

灰谷さん・・・「はい」

島のおばあ・・・「頭を良くするために勉強するのではないですよ。心を良くするためです」

灰谷さん・・・「なるほど」

島のおばあ・・・「わたしは孫にいうんです。

勉強するのは、えらい人になるためじゃなくて、いい人になるためだよって」

灰谷さん・・・「ああ、なるほど」

島のおばあ・・・「人は頭で勝負してはいけない。心で勝負するんです」

灰谷さん・・・「すごいお話ですね」

お子さんから「ねえ、なんで勉強するの？」と、質問されたご経験をお持ちの方がいらっしゃると思います。そんな時、おもわず「・・・」となる方も多いと思います。この会話「決定版」だと私は感じました。

「こころを良くするため」ということばを、自信を持って言われる方は渡嘉敷島（沖縄県）のおばあちゃん、学校の先生でもない教育関係者でもない、島で暮らしてきたひとりのご老人です。ご自分の人生から学んだ自信に満ち溢れたことばです。

灰谷さんは「島」でのくらしから多くを学んだと言っています。島の「ひとびと」から学びました。

「ひと」→「ひとがら」です。また、現行教育についても、「教育と農業に競争原理を導入したことは間違いだ」と主張しています。私も100%その考えに賛成です。そう発言されたのが今から30～40年も前の頃です。どうでしょうか、現在でも旧態依然、その主張はピタリと当てはまってしまうと感じます。

さきほどの3行の詩、子どもが自由に感じたことを書き上げたものです。現在はどうでしょう。子どもが何か文章を書く瞬間、それは「作文」であったり、「感想文」であったり、そのどちらも「評価」を伴う行為として子どもは受け取ります。書きながら常にあることを脳裏に浮かべつつ鉛筆を握ります。「こんな少ししか書いてなかったら、先生になんて思われるだろう。しかられるかもしれない。こくごの成績悪くなるかもしれない。もっとたくさん書かなきゃ・・・。」

成績のことばかりが頭に浮かびます。おうちのひとが読んだ時のリアクションばかりが頭に浮かびます。常に他人の顔が浮かびます。

教育に競争原理は必要ありません。こころを良くするために、のびのびと自由に、おもいつきり羽を伸ばせること。「ニコニコ」が子どもの特権なはず。勉強で助け合う姿が当たり前に見られる光景が素敵ですね。